

広島・長崎 65年目の原爆の日

広島・長崎は、それぞれ6日と9日、被爆から65年目の「原爆の日」を迎えました。

広島市主催の「原爆死没者慰霊式・平和祈念式」には、74か国の代表が出席し、中でも、潘基文（バン・ギムン）・国連事務総長の出席や、

原爆投下国である米国のルース駐日大使の出席により、現在核を保有するロシア、中国、インド、パキスタンと米、英、仏の全ての核保有国が出席するなど、『広島』の位置付けが『鎮魂』から『核軍縮を巡る国際政治の場』へと変化しようとしています。

そのような中、菅直人首相は、「唯一の被爆国であるわが国は核兵器のない世界の実現に向けて、先頭に立って行動する道義的責任がある」と述べましたが、式典後の会見で、秋葉広島市長の「核の傘からの離脱」については「核抑止力は我が国にとって引き続き必要」と否定的見解を示しています。

私たちは、このような否定的な現実から目をそらさず、しっかりと平和について訴えていかなければなりません。今なお原爆症に苦しみ、この一年間で広島5,501名、長崎3,114名が亡くなっていることを見過ごしてはいけません。

最後に、国連・潘基文事務総長のあいさつの一節を紹介します。

「今日ここには核廃絶まで消えない「平和の灯（ともしび）」があります。

被爆者が存命中に、灯を消して希望の光に変えましょう。核兵器のない世界という私たちの夢を実現しましょう。私たちの子どもたちや、その後のすべての人々が自由で、安全で、平和に暮らせるために」



二度とあってはならない！
核兵器のない世界を実現しよう！